



ペンキ塗りたて 平井達也

私の魂はペンキ塗りたてだから 触れないで ずっと淡い色で 落書きささされるがま became になって けれど 釘で引っかかれ 靴底を押し付けられ ところどころ地の色が あらわになつてきてしまつたから 塗り直しました 今度はあざやかな原色に 目を射るような色に もう直視させないし 好きに掃さぶるような真似もさせない まして、今は 塗り立てだから あなたの柔らかな指先で そつと触れることさえしないで



タケシ 伊武トーマ

寒いな、タケシ。 おれはジャンパールの襟を立て 息子に言った。 うん。 二十二歳の息子がかつて小さな命だった。 おれはその命の時いた。 ただ一生懸命生きる。 それだけでいいのに 父であるおれは生きることに迷い 息子もまた瘦せ我慢して寒さをこらえ 消えそうな声でうなずく。 タケシ。 半世紀以上着古してぼろぼろだけれど このジャンパーをおまえにやろう。 寒いな、タケシ。 もう振り向かなくていいから うなずかなくていいから。 ただ一生懸命生きればいいから。 タケシ 前を向いて歩いてゆけ。



(夢のなかで夢見たものに、) 小島きみ子

そして、銀香の木の下で、死ぬのには、もつてこいの小春日和の日でした。 立冬です。 あなたの柔らかな声が、 やはりあなたは、覚えていく冬にふさわしい。(夢のなかで夢見たものに、) (夢の中で願ったものに、) 私のことが、追いつかないのです。 木枯らしが吹く前の穏やかな、土曜日でした。 あなたの、りんりん響く声を見ていました。 澄んだ空を覆い尽くす金色の漣でした。 愛し続けるというこの烈しいストレスをこえようと、あなたは居るのか居ないのか。 あの雲をこえて、 (ゆふやみは みちたづたづしつしまちて いませわがせこ そのまにもみむ (万葉集712)) そんな歌を、夢の中で夢見たのに。 (夢の中で願ったのに。)

天秤 神泉 薫

今朝生まれたばかりの 銀色に光る小さな手のひらに聞いてみる きみの上に乗ったつややかな赤い林檎ひとつの重さに 釣り合うものは何? 手のひらは答える わたしもまだ産声を上げたばかり この重みに慣れないのだ 林檎よ。 お前の重きはどこから来たの? 林檎は答える わたしもまだ実るという重さと完成形の起源を知らない わたしを実らせた知恵ある木の幹に聞いてみよう わたしの重きはどこから来たの? 木の幹は答える わしは ひとすらすら上へ向かって伸び上がる それだけに精神を集中したのも わしの体の其処此処にふくらみを覚えたのは ただの偶然か必然か 澄みきつた思考の持ち主 青空に聞いてみよう わしの赤いふくらみはどこから来たのか? 青空は答える わたくしは天上というまなざしを持つ傍観者 地上に起こる様々な事象の発芽を見守るだけの存在 あなたの体にあつた林檎は 静いと自由がせめぎ合う起伏に満ちた大地を 点々と新たな色彩に色づけ 見えぬ闇の奥底であなたの根は放射状に広がっていく 木の葉よりも重い。 まるみを帯びた林檎は ゆたかな水分をふくみ 渴きを覚えた者たちの咽喉と心をやさしく潤す 木よ、あなたはその生に従つて まつすぐ立つていれればいい 林檎よ。 あなたの重みは 世界から派遣された瑞々しい希望のふくらみ やがて、その意図を知つた者が ああ地平線の果てから訪れるだろう もうひとつの銀色に光る小さな手のひらを携えて あらゆる等しさが地球の軸となる日 内なる天秤のすこやかな均衡がこの星を飾れば 風の子守歌が聞こえ 揺れる唇の狭間に がりり しゃりりと なつかしい解放音 ハレルヤ ハレルヤ 引力から解かれ はれやかにスパークする 形而上の音楽 飛沫が 鳴る

雲のうら、霧のおもてへ、わた…

海塾今日子

ひろいことも、と、あなたがきづいた たくさんのおふちようが、みちあふれ たくまのなかで、かけまわる だれかがわらい、だれもがうつむき わたしは、わたのなかでくもるだろう ぐえにならぬ、きりばかり くべつなか、つかなければ、いいえ たどりつけない、ゆえに ふくろこうじは、いりぐちなのです うすかわいちまいで、ちかづくものよ せまいことも、と、かつてがひろがる みちみちに、まぎれた、たくさん、は、いらぬい 子どものくもに、のみこまれ やまのこちらを、だれかが、ながめた けれど、わたしのそとに、それはあると たいようのかけ、くぐもるだろう、はい とおくてちかい、しまをおもう ぐえにならぬ、かいわだつたのだろうか かぜをうけ、きれぎれをたどり、もどりますか ひまよりいたいで、みあげるものよ ひろつたごだま、と、わたしをこぼす せまりくるごだま、と、あなたをおぼえた よちようの、こんせきでしたか、みたきがします わたしのそこで、つぶやくあんこう どこかでみつめ、だれかがみおくる ひろつたごだま、ここにいます わたのなかで、くもをねむる くべつのはてで、ではいりしたの、いえ たよりのかげに、ふくろもわれて とうとうしまに、みられたのだよ はしやく、ことばに、とじられ、すこしうすかわいちまいで、ひろげるものよ

(真夏の窓際の厚ぼったい目蓋にごろんと集う……)

たなかあきみつ

真夏の窓際の厚ぼったい目蓋にごろんと集う 何本かバナナが脳挫傷のじんじん進行性の痕跡みたいに 黄色地に褐色の斑点がアイスバーもどき (黒褐色か茶褐色か) 星雲の粒々のような鱗が かつてはもろ原色の革だつた古靴のように やおら過食の歪な靴音を響かせる 応急の静物画の逸品の皿のなかではなく、バナナ鱗(こう名づけたい、積乱雲と同じく)が ジグザグに走行するホテルよ火照る 午後三時をすぎて花屋の主人が 新参の出入り業者者にぼつとりといわく ひと雨来そうだなどうもひと雨 そう、じゃあじゃあ白乱れて黄味を制す 多肉植物の傍らで覆水盆にかえらずと言ふなかれ とばかりにむしように目玉焼きをバクつきたくなる 壁面の引つ掻き傷の名手ジャック・プレヴェールが 突如としてそそのかすまもなく巻末の《ピカソの魔法の灯》が自転して順不同に灯るだろう この一車線の道路の分岐点のひとつではないが 古びていても現役の図書館脇の (日頃の館員の丹精こめた思惑とは関係なく) 手入れの行き届いてない花壇もときから 手はずしらず葉鶏頭のあでやかな群衆へ 地中海沿岸のオペラ歌手の寝乱れた髪の毛のように 花びらがもつぱら不定形にはみだしているヴェルミヨンの 破線だらけの彼岸花よ目録を熱くするグラウンドの 土埃の《カプリチオス》をすかさず牽制しつつ 海の星がなまなましいひとであるかのように 海の雀はがぜん蝶だから 皿の煮汁に半身でつかつて不眠になる わがフォークで逐次身をほぐされ これも子持ち蝶だからこそ 粒々はたっぷり胃袋で遊泳する ジャック・プレヴェールによれば、壊れたブランコで ぼつんと人形と卵の暴力は 靴ふきマットめがけて串刺しにされる 肉離れのスプリンターの追いつけない風参考記録ながら この熱覚マシントをおおバナナの額面からがら つつと剥がせよつと 反射的にアレクシス腫の反応する瞬間の フライニングによる炎症がそれともめりめり延焼を スプリンクラーならぬスプリンターの なんと健康な健脚から 仮設のスターティングブロックからなんとも ちぎればかりのニュエロンの雲行きから

崖 池田 康

道が尽きるころの崖は 飛び立つための崖でもある 世界はある 道があろうとなかろうと 世界は前進を求める 引き返すか 飛ぶか 崖は決断を求める 崖からの眺めは 絶景であり絶望であり壮麗であり冷酷であり 道が尽きるころの崖は 切り裂き 世界をまきだしにして 照る

海藻回想 森山 恵

船が岸を離れる 無人の岸に向かつて紙テープが投げられる いく度も いく度投げられても届かず 水際に落ちて 青緑色や藍色のテープが水面に渦巻く 海藻のように 渦巻く回想があつて 船は岸を離れる 移民たちは 丸窓から海を見た 船酔いする若い女は うつすらと額に汗を浮かべている みどり子は 水を蹴って早く生まれたい 早く生まれたい からまる海藻をほどいて早く生まれたい 鏡に映る顔を見て 女はうつりとした表情を浮かべる 甲板でアルレッキーノが逆立ちする とんぼ返りして 棒を振り回し帆柱と決闘する 色とりどりの衣装が躍る アルレッキーノは綱をつたって帆桁を駆けのぼる 女は生む 海が唇を開く 船は憤っていたか 海は憤っていたか



今回の執筆者
平井達也=東京都練馬区
小島きみ子=長野県佐久市
海塾今日子=東京都世田谷区
たなかあきみつ=東京都国立市
伊武トーマ=福島県福島市
神泉薫=神奈川県相模原市
森山恵=東京都豊島区
池田康=愛知県名古屋